



日本ブロンテ協会



第34回大会プログラム

日時 2019年10月12日(土) 9時50分から17時30分まで
 場所 京都大学吉田南キャンパス 総合人間学部棟1階 1102 講義室
 〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町 TEL 075-753-6533 (総務掛)
 アクセス: JR / 近鉄「京都駅」から市バス206系統で「京大正門前」下車(約40分)。
 阪急「河原町駅」から市バス201系統で「京大正門前」下車(約20分)。
 地下鉄烏丸線「今出川駅」から市バス201系統で「京大正門前」下車(約15分)。

- ★受付 9:20～
 総合司会 神戸市看護大学教授 山内 理 恵
- ★開会の辞 9:50
 日本ブロンテ協会理事 小野ゆき子
- ★研究発表 10:00～12:00 司会 熊本大学大学院教授 大野 龍 浩
 1. 「ヒースクリフの〈復讐〉」 京都大学非常勤講師 石井 昌子
 2. 「『風と共に去りぬ』と『嵐が丘』」 元龍谷大学非常勤講師 良田 玲子
 3. 「自然風景が示す共感の“sign”—Jane Eyre と Maggie Tulliver の視覚的能力」 早稲田大学教授 木村 晶子
 4. 「Brontë Studies から見られるブランウェル像」 日本大学非常勤講師 堀 紳 介
 大阪工業大学特任講師 瀧 川 宏 樹
 — 休憩 —
- ★総会 13:00～13:30 司会 日本大学教授 田村真奈美
- ★奨励賞表彰 講評 日本ブロンテ協会奨励賞審査委員長 京都大学教授 廣野由美子
- ★会長挨拶 青山学院大学名誉教授 橋 本 清 一
- ★会場校挨拶 京都大学大学院人間・環境学研究科長 杉 山 雅 人
- ★大会委員長挨拶 京都大学教授 廣野由美子
- ★講演 14:00～15:00 司会 東京大学名誉教授 海 老 根 宏
 演題 「なぜヘレン・バーンズは『ラセラス』を読んでいたのか？」
 — ブロンテ作品にみるイギリス18世紀」 慶応義塾大学教授 原 田 範 行
- ★シンポジウム 15:10～17:20 「ブロンテ文学における英国性と異国性」
 司会・発題者 元川村女子学園大学教授 田 中 淑 子
 発題者 摂南大学准教授 皆 本 智 美
 発題者 神戸海星女子学院大学教授 惣 谷 美 智 子
 発題者 駒澤大学准教授 川 崎 明 子
- ★閉会の辞 17:20 元近畿大学教授 清 水 伊 津 代
-
- ★懇親会 17:50～18:50 於 本部構内レストラン「カンフォーラ」 会費 5,000 円
 司会 大阪大谷大学教授 服 部 慶 子

研究発表

1. 「ヒースクリフの〈復讐〉」

京都大学非常勤講師 石井 昌子

ヒースクリフはなぜ、リントン家とアーンショー家への復讐の意欲を失ったのだろうか？ アーノルド・ケトル（1951）は、ヒースクリフはヘアトンとキャサリン二世を抑圧する中で、自分が虐げられた立場にあるという自覚を覆されやる気をなくしたとする。テリー・イーグルトン（1975）は、システムティックな抑圧に夢中になることで抑圧は「機械的」になり、「自分自身の処刑者」になったとする。植松みどり（1985）は、「あらゆる感情を押し殺しながら、法のぎりぎりの限界を守って生きていく緊張に疲れ」「拒食状態に陥」ったとする。廣野由美子（2015）は、「ヘアトンには、ヒースクリフがキャサリン一世に裏切られたときに経験したような心の損傷はなく、『ねじ曲がる』ための決定的要因が欠如して」おり、彼は「破壊の無意味さを悟り」「長年の迷妄から覚めた」とする。本発表では、ヒースクリフが復讐を放棄した理由を、さらに探りたい。

2. 「『風と共に去りぬ』と『嵐が丘』」

元龍谷大学非常勤講師 良田 玲子

M. ミッチェルの『風と共に去りぬ』に関し「これは、男に対してある種の子供じみた愛情を抱く独特の性格の遺伝の物語です。スカーレットの母親はろくでなしの従兄弟と恋に陥るが、彼は酒場で殺されてしまう。彼女はその後結婚して忠実な妻となり、夫のために大農園を築きあげ、その従兄弟の名を口にして死んでいく。彼女の娘はこの性格を遺伝的に受け継ぎ、やはり美貌の青年に失恋する… 農園を守る為にあらゆる経験をした後ある日突然それが全く子供じみた夢に過ぎなかったと悟る… いわばこれは精神医学的な作品です」とする兄ミッチェルの分析がある。この要約は『嵐が丘』の複数の男を愛した二人のキャサリンをも示唆しないだろうか？ しかし、『嵐が丘』は既に文学に数えられているが、『風と共に去りぬ』は未だにアカデミックによる校定本も出ていない。今回の発表では *Gone with the Wind* が将来文学と呼ばれうるのか、正典との境界を検証する。

3. 「自然風景が示す共感の“sign”—Jane Eyre と Maggie Tulliver の視覚的能力」

日本大学非常勤講師 堀 紳介

『ジェイン・エア』（*Jane Eyre* 1847）の物語前半では主人公ジェインは自然風景を明確に見ることはない。『フロス河畔の水車場』（*The Mill on the Floss* 1860）のマギー・タリヴァー（Maggie Tulliver）の視覚的能力も物語前半では自然風景に対してはほとんど発揮されない。ジェインもマギーも物語が進むにつれて家庭の外へと自らの行動範囲を広げ、自然風景を視覚的に認識するようになる。ジェインは目の前に広がる自然風景に自分の願望を投影させ、自分の孤独な状況を視覚的に解釈しようとする。マギーは物語を通して自らの意志を行使し、自然風景を見ることで社会との繋がりを見出すようになる。本発表ではジェインとマギーの視覚的能力の成長と発展に着目し、それまで自分の居場所となっていた空間から切り離され、孤独になった時に彼女が自然風景から読み取る共感の“sign”について考察する。

4. 「*Brontë Studies* から見られるブランウェル像」

大阪工業大学特任講師 瀧川 宏樹

ここ数年、ブロンテ家の生誕 200 年記念が順次祝われている。2017 年には英国ブロンテ協会の機関誌 *Brontë Studies* において、ブランウェル特集が組まれた。しかし、今から 50～100 年前の生誕 150 年、100 年の節目に彼の特集が組まれることはなかった。今回ブランウェルも生誕祭の仲間入りを果たしたということは、この 50 年の間にブランウェル作品への関心や評価が急激に高まった何よりも証拠であろう。生誕祭を終えた 2019 年になっても、ブランウェルに関する論考が同機関誌に投稿され続けており、今後も更なるブランウェル研究が進められていくことを暗示しているかのようである。本発表では、*Brontë Studies* およびその前身である *Brontë Society Transactions* に掲載されたブランウェルに関する批評の動向を探り、この 50 年で築き上げられてきたブランウェル像を浮き彫りにしたい。

シンポジウム

「ブロンテ文学における英国性と異国性」

ヴィクトリア朝時代は、政治、経済、文化、生活に至るまで異国からの要素が侵入する一方で、英国らしきの変容が迫られた時代である。異国はブロンテ姉妹の想像力を活性化させると同時に、自分たちが英国内では他者であることも意識させた。英国性と対峙する状況下で、認知を変える装置として異国が使われるブロンテ文学においては、どのように独自の物語が語られるかを明らかにする。

シャーロット・ブロンテとヨーロッパ

摂南大学准教授 皆本 智美

2016年の国民投票でイギリスはEU離脱を決めたにもかかわらず、その後も混迷の最中にある。この混迷は取りも直さず、イギリスとヨーロッパ大陸の切っても切れない関係を示唆していると言えるだろう。シャーロット・ブロンテの生涯こそ、ヨーロッパと切っても切れない関係にあったと言って過言ではない。ブリュッセルに留学しただけでなく、少女時代に愛読したリタラリー・アニュアルに観察されるように、「他者」としてのヨーロッパ大陸表象が手を伸ばせば届く環境で育ち、彼女もまたそれらを解釈したうえで自らヨーロッパ表象を創り出し描いてきた。本発表では、その背景に、対仏戦争が長年続いたにもかかわらず途切れることのなかった英仏間の人的・知的・文化的往来があったことを確認し、シャーロットの生涯にわたるヨーロッパ大陸への関心をたどりながら、『ヴィレット』におけるヨーロッパ表象を中心に再考してみたい。

シャーロット・ブロンテと「異国」

神戸海星女子学院大学教授 惣谷 美智子

『ヴィレット』執筆当時、シャーロット・ブロンテは、あいつぐ弟妹たちの早世の喪にまだ留まっていたのであり、主人公ルーシー・スノウの造形にも、そうした作家の精神的な翳りが読み取れる。ルーシーの神経の過敏さ、感受性の繊細さは、おそらくシャーロット自身のものでもあっただろう。

シャーロットは、『ヴィレット』という、それ自体がそもそも虚構であるはずの創作世界に、さらにゴシックめいた異国、ヴィレットを構築することによって万全の虚構性を確保しているが、あたかもそうしたある種の「異国」を安全弁として自らの内面を解き放っているようにも思われる。Robert B. Heilmanのいう“New Gothic”、つまり人間の内面を深く掘り下げるゴシックの典型である『ヴィレット』を、ルーシーの（そして、ひいてはシャーロット自身の）内面の苦悩と、それに対する創作という一つの救いを通して考える。

『嵐が丘』におけるイングランド性—法律や思考の枠組みとしてのイングランド

駒澤大学准教授 川崎 明子

『嵐が丘』の地理的印象という点、ヨークシャーの人里離れた一地方というある程度現実的な設定か、地理的具体性を超越した神話的小宇宙のどちらかに集約されやすい。また『嵐が丘』における「異国性」という点、よそ者で視覚的にも異質なヒースクリフに議論が集中しやすい。本発表は、そのような『嵐が丘』をあえて「イングランド」という枠組みで再考するものである。その際、頻繁に顕現する「異国性」の裏側に察知できるネガとしての「自国性」ではなく、数は少ないが実際テキストに記述されたサインにできる限り注目したい。具体的には登場人物の行動を方向づけるイングランドの法律や思考が及ぶ範囲としてのイングランドが中心となるが、そのようなイングランドと「特異な田舎」とか「神話的空間」といった場のイメージとの関係、ならびにイングランドとヒースクリフの「異国性」の関係についても考えたい。

アン・ブロンテと異国性

元川村学園女子大学教授 田中 淑子

アン・ブロンテの作品においては、異国的要素が作者や登場人物の認知を変える装置として働く形跡はほとんどみられない。むしろ、そのぶれない道徳観に基づくリアリズムから「あと10年長生きしたら、オースティンと肩を並べる作家になっていただろう」とジョージ・ムアに指摘された。姉のシャーロットが、オースティンが何故評価されるべきかを理解できなかったことは意義深い。この度はアン・ブロンテの作品は英国小説の偉大な伝統を継承しているのだろうかを検証してみたい。社会的地位の曖昧さ故に孤独に苦しみ、沈黙しがちであるヒロインが主役の『アグネス・グレイ』(1847)とオースティンの『マンズフィールド・パーク』(1814)を取り上げる。強いストレス下にいるヒロインたちは孤独や嫌悪の感情に苦しむが、その制御および調整の仕方が違う。そこに焦点を置き、アン・ブロンテが10年後オースティンと肩を並べ作家になるには何が必要なのかを考えてみる。

アクセス：

- ▶ JR「京都駅」→市バス京都駅前 D2 乗り場より、206 系統「三十三間堂・清水寺・祇園・北大路バスターミナル」行→「京大正門前」(約 40 分)
- ▶ JR「京都駅」→地下鉄烏丸線「京都駅」より「国際会館」行→「今出川駅」(約 10 分)→市バス烏丸今出川駅前より、201 系統「出町柳駅 百万遍・祇園」行→「京大正門前」(約 15 分)
- ▶ 阪急京都線「河原町駅」下車→市バス四条河原町 E 乗り場より、201 系統「祇園・百万遍」行または 31 系統「高野・国際会館駅・岩倉」行→「京大正門前」(約 20 分)

* タクシー：JR 京都駅から約 30 分・約 2,000 円、阪急河原町駅から約 15 分・約 1,400 円



<ご案内など>

- * アクセスは <http://www.h.kyoto-u.ac.jp/access/> でもご覧いただけます。
- * 昼食は、吉田南キャンパス内の生協食堂が休業のため、本部キャンパス内のレストラン「カンフォーラ」(本部正門西側)、「タリーズコーヒー」(百周年時計台記念館地階北側)、「ラ・トゥール」(同1階、要予約)などをご利用下さい。または、ご持参下さい。
- * お車でのご来場はお控え下さい。学内は禁煙です。なお、ごみはできるだけお持ち帰り下さい。